

# 習慣的行動の再構成が意味するもの：デューイの習慣論

－ 子どもの新たな知識獲得過程をモデルにして －

天 間 環\*

On the Meaning of Reconstruction in Habitual Behavior :

Based on Dewey's Concept of Habit

－ From the Child Study Model in New Knowledge Learning Processes －

Tamaki Temma

われわれは、人間形成の問題を具体的に考察するために、個々人において形成される習慣的行動に着目する。それは、われわれの行動は、諸々の習慣的組織が相互に浸透しあって習慣の体系を構成しており、この習慣の体系が個々の行動を支えそして新たな習慣的行動を生み出す母胎となるからである。そこで本論文では、先ず、J. デューイの習慣概念に基づいて、これまでの古い習慣概念とは根本的に違う人間の習慣的行動の特性を明らかにした。次に、この習慣的行動が変革・再構成される過程を、デューイの探究の理論に基づきながら学校＝教室で具体的に展開される学習活動における知識の獲得過程をモデルにして、考察した。そして結局のところ、習慣的行動を再構成することは、人々の日常経験の諸過程を根本的な仕方に変更し、改善・改良しようと目指す「社会改革」に携わることを意味する。これがいわゆるデューイの「民主主義」の考えである。

キーワード：習慣的行動、習慣的行動様式、反省的意識的行動、社会改革、民主主義

## 序論

われわれは、幾つかの例外的行動を除いて、日常普段の生活過程のほとんど全てを前意識的・習慣的行動に依拠して営んでいる。子どもたちが、学校で日々営む生活・学習活動においても同様である。彼らは、通常日常普段の生活や行動の過程と密接に結びつき、安定した状況の中で半ば安心しきって時にはのんびりと生活している。しかし、彼らは、これまで経験したことのない新奇な要素（新しい学習問題等）に遭遇すると状況は一変する。彼らは、一瞬間喰い立ち止まる。しかし、彼らは程なく問題解決のため、これまで自ら獲得した習慣的行動様式（諸知識）に依拠しながら能動的に取り組み始め、そして解決に至る。このようにして、新たな習慣的行動、即ち知識を一つ一つ獲得し丁寧に積み重ねている。では一体、新しい習慣的行動が一体いかなる過程を辿り獲得されていくのか、その習慣的行動獲得のメカニズムを普段の教室の中で展開されている学習の具体的場面に則しながら — 子どもの新たな知識獲得の過程

---

2010年9月15日受理

\* 尚綱学院大学 教授

をモデルにし、手がかりとして明らかにしていきたい。

ところで、習慣概念については、J. デューイ (1859 - 1952) において、『人間性と行為 Human nature and Conduct』、『民主主義と教育 Democracy and Education』、『経験と自然 Experience and Nature』等の著作において既に綿密に分析されている。特に、彼の習慣概念に関わる「人間性」とその「行為」についての分析と理解は、重要な意味を持っている。それが重要な意味を持つことの理由は、彼の思想の特徴そのものにある。即ち、デューイは、哲学的思索の基礎を、「日常普段」の「生活経験 (life-experience)」に基づく、「第1次経験 (primary experience)」における「素材 (subject matter)」におく<sup>(1)</sup>。つまり、体系的な反省的思考 — 「第2次的生活経験 (secondary, reflective experience)<sup>(2)</sup>」と区別して第1次的生活経験及びその素材・内容に先ず注目するのである。即ち、経済・社会的、政治的、道徳的、芸術的、宗教的、教育的等々の問題関心をすべて未分化なままに含んだわれわれの日常生活場面において経験されるところのものが、その哲学的考察の素材となるのである。人々の日常生活の「最小限度の偶然的な反省 (a minimum of incidental reflection)<sup>(3)</sup>」しか含まない、日常生活の習慣的行動において経験される素材・内容を哲学的考察の出発点とするのである。かくしてこのような哲学的思索の方法に基づいて、極めて多彩な形をとって人間性探究の理論が具体的に展開されるのである。

そこで、本論文において、デューイの哲学的思索の基礎に立ち、彼の新しい習慣概念を展望しながら、それに依拠しつつテーマ解決に向けせまっていきたい。

## 1 習慣的行動の偏在性

習慣的行動が、われわれの日常普段の生活過程のどこにでも、いつでも見いだされることは明らかである。人間は、常に衝動的行動に身を委ねているわけでもないし、また意識的・反省的知性を間断なく働かせて行動しているわけでもない。我々の日常普段の行動の大部分は、明確な意図や意識を持って為されているのではない、常軌としての行動である。われわれは、朝起きて衣服を身につけ、食事をし、日常の仕事に出向くがそれらの行動や動作の諸過程にそれぞれの特異な意義や意味を付着させてそれを意識しているわけではない。即ち、「これらの行動は、日常の決まり切った仕事であり、その多くは、意図をとらない何をしているのかの知識をともなっているが、当然のこととして行っている<sup>(4)</sup>」のである。われわれは、日常普段の生活過程のほとんど全ての行為を習慣的行動に依拠して為している。例えもし、その行為が「彼の人生にただ一度しか起こらなくても、それはやはり習慣的行動による<sup>(5)</sup>」ものである。ところで、人間の日常の生活や行為は、ほとんど全てにわたって習慣的に為されているわけであるが、それでは習慣的な特性や機能によって浸透されるのを免れているような生活過程や行動には、一体如何なるものが残されているのかということが問題になる。習慣的行動に基づかない、この種の行動について考察することは、習慣的行動が人間の生活や行為の中で占めているところの圧倒的に重要な地位をより明確にし、際立たせることになる。その例外的な種類の行動として次の4つが考えられる。その第1は、新生児の「生得的反応、反射的行動」がある。それは、人間の誕生直後の「呼吸・産声・乳を吸う行動」、「対象なき笑い」、さらに生後1ヶ月頃までの間に見られる「反射性の歩行運動や物に触れたら反射的に握ってしまうような行動」、等々である<sup>(6)</sup>。第2は、われわれの「全く反射的な反応」である。それは、「突発音を聞いて

跳び上がる」、「熱い物に触れて思わず手を引っ込める」、「急な明るい光に直面して瞬きをする」など、人が単に物質的な事柄に生物学的な仕方では反応する場合である<sup>(7)</sup>。第3は、人生の危機的又は限界的状态における主体的な決断に基づく行為である。これは、自らが形成・習得してきたあらゆる習慣的行動を動員し、組織し、結集し、凝縮して行使しつつ、最終的に習慣的行動の機能そのものを超越し、そこから飛躍する瞬間として考えられる行為である。これには、突発的な火災に遭遇したときに、信じられないような力を発揮する場合や、逃げ惑う中から何とか活路を見いだそうとする場合などである。第4は、科学者や芸術家においてみられるような、極めて特殊化され洗練された、繊細で高度に複合的な習慣的行動である。これはこれまで形成された習慣的行動の機能を完全に超えた創造的活動である。以上のような、習慣的行動によって決定的な仕方では規定されていない、習慣的行動の影響から飛び出した例外的な生活過程や行動場面に注目することは、逆にそうした例外的場面が希少であること、習慣的行動の機能がわれわれの生活や行動に隈無く浸透していることを逆向きの仕方では明らかにすることになる。

そこで、われわれの生活において、意識的・意図的な行為の過程を取り囲んで、習慣的行動が広汎に展開しているということを、改めて指摘したい。その第1に、意識的・意図的な行動や思考・判断に先んじて習慣的行動がすでに広範に存在していることを指摘できる。このことは、あえて指摘するまでもない周知の事柄であり、われわれ自身の生活の過程を可能な限り広く反省的に展望してみても、その意図する内容をまさにそれと意識しつつ為すような種類や水準の行為は、ほとんど希である。科学者といえども、その水準の、厳密に意識的に統制された思考活動や研究上の操作に常に従事しているわけではない。その種の思考活動や研究上の操作は、彼に対して意識の働きにおける極度の緊張を強いるのであって、彼はその意識的緊張にさして長く耐えることができるわけではない。むしろ、比較的長い時間又は期日にわたる精神的な休息や余暇を挟んで、彼は自らを鼓舞激励しつつかの意識的緊張の高みへと再び上り詰めようとする。芸術的製作の努力においても、その種の事情は根本的に変わらない。第2は、意識的意図的な行動の過程は、多種多様な習慣的行動に直接的に支えられ、それを自らの構成要素の圧倒的部分として組み込んで初めて成り立っているものであることが指摘される。このことについては、犯罪を犯した人、称賛されるべき道徳的行為をした人物、あるいは、自らの企業にとって決定的な意味を持つ契約を取り結んだ経営者などの例を挙げることができる。彼らはいずれも、歩くか自動車に乗るかして、その行為の場面・舞台へ至っている<sup>(8)</sup>。歩いたり自動車を運転したりする行動やその過程の出来事は、通常、彼の意図的に遂行された焦点的な行為とは結びつけられていないし、そこで意識される意味内容を構成するものとはなっていない。だがしかし、それら両者は無関係かといえそうではない。後者、即ち日常的な前意識的な水準の行動諸過程が、前者即ち反省的・意識的な水準の行為と連続しその一構成部分となっている。また、例えば、心理学的な実験的条件の下で為される被験者の反応行動の、極めて高度に意識的な性格、即ち一定特殊な観点に基づいてあらかじめ系統的に制限されて構成された、いわば特殊に人工的な操作の産物としての性格が、挙げられる。この場合には、被験者は、実験に関わりのある特殊な反射的行動以外の全ての行動や意識・態度を自ら意識的に統制しつつ、いま目下の実験的反応行動から除外しなければならない。そして、そのためには極度の意識的な緊張が強えられるし、この緊張の持続には誰も長時間耐えられるものではない。第3に、意識的・反省的性格を高度に帯びた専門技術的な行為や判断の過程、独創的な研究活動や芸術的創作活動の過程の核心あるいは頂点を為す部分において、習慣的行動が見いだされる。その種

の過程として、例えば科学研究における仮説の着想の場面や、芸術制作における創造的発想の瞬間及び専門技術的行為における個別的状況判断等においては、意識的・意図的な反省的思考と、習慣的な生活感覚ないし良識との根本的な融合が見られる。

## 2 デューイにおける習慣的行動の一般的特性

かくして、人間行動における習慣的行動様式の特長や機能を改めて具体的に考察してみるとの重要性が明らかなものとなる。ここでは、個々人において形成される習慣的行動様式の一般的特性を、デューイによって提唱される、新しい「習慣」概念に基づいて考察してみたい。彼の「習慣」概念は、古い伝統的習慣概念と比較して検討することによって、その内容を一層明らかにすることができる。古い伝統的習慣概念を彼が批判するのは、次のような理由によるものである。即ち、①習慣的行動は単なる慣れ、あるいはただ単なる反復的行動だけに制限して考えられてきた<sup>(9)</sup>。また、②習慣的行動は、「悪習とか、愚かな怠け癖、賭博、酒や麻薬への耽溺」など悪癖にだけ結びつけられて考えられていた<sup>(10)</sup>。つまり、われわれの本来の行動のうちに習慣的行動の要素や働きを認めたり、自分の意志や性格と習慣的行動との結びつきを認めたりすることが、伝統的には拒否されてきた。さらに、③習慣的行動は、「歩行や、楽器を演奏することや、タイプを打つこと」などのような、「技術的能力 (technical abilities)<sup>(11)</sup>」と考えられてきた。即ち、習慣的行動とは、「箱の中の道具のように意識的決意 (conscious resolve) によって使われるのを待っている手段<sup>(12)</sup>」であって、それが必要になったときにはいつでも都合よく取り出してきて使用され得る「単なる受け身的な道具 (passive tools)<sup>(13)</sup>」であると考えられてきた。このような特徴を持つ、古い習慣概念の背後には、習慣はわれわれの自己に属するものであるが、行動のための単なる技術・能力として周辺の・末梢的な地位を持つ癖や傾向に過ぎないものであり、われわれの本来の意志に基づいて統制できるものである、という考えがあったからである。

そこで、これらの伝統的習慣概念に対して、デューイによって新しく提唱された習慣的行動様式の一般的特性を指摘する。即ち、まず最初に、(1) 習慣的行動の、強固で安定した前意識的性格が挙げられる。われわれは、「歩いたり、声に出して読んだり、電車から降りたり乗ったり、洋服を着たり脱いだり、幾千という役に立つ行為をするが、それらのことを考えてしているのではない」<sup>(14)</sup>。日常普段の生活や行為の過程としての習慣的行動は、それを導く目的や意図も、またその過程を構成する動作や態度、感情や思考等の諸要素の意味も、主題的な仕方では意識されることもないままに、為される。それは、改めて疑問の余地もないほどまでに、親しみ馴染んだ行動である。次に、(2) 習慣的行動の、単一の目的や関心を目指して、体系的な反省的意識の統制の下にあらかじめ選択された一定の単一の対象を操作して、純粹に単一の性質や意味を担って為されるのではなくて、多種多様な意味や性質、雑多な関係や要素、目的や関心や観点をそれ自体の内部に同時に混在させて含んで為される、という在り方が指摘される。それらの種々雑多なものの、同時的な混在ということは、さらに具体的に次のように述べることができる。即ち、それらのものが、それ自体として、未分化、未発達、萌芽の状態にあること、それらのものの相互の間の差異や境界が曖昧で、相互に浸透しあい重なり合っていること、それ自体曖昧で、その意図や目的意識が、雑多なそれらのものの間を一つの物から他のものへと、絶えず移りゆき、流動していること、等を指摘することができる。さらに、(3)



習慣的行動様式において、多様な行動上の諸々の価値や関心の混在を包括・統合するもの、実践的な態度・性向の一定のまとまりの在り方が問われる。この種の行動は、無限に多様で雑多な行動上の価値や内容を、全く無秩序のままに相互に無関係にただバラバラに併存させて、包含しているわけではない。これらの行動上の諸価値や内容は、明確に意識されているわけではないが、それら相互の間に一定の秩序やまとまりを有している。そして、そのような一定の秩序やまとまりを支え、且つまたその核心をなすところのものは、最早、一定・特殊な目的や観点や意味の体系・反省的な意識ではなくて、半ば無意識的な人間固有の態度である。この半ば無意識的な人間固有の態度は、それ自体、雑多な混合体であり、緩やかに移りゆくものであるがそれを構成するものとして、根本的な関心や価値観、好み、等が考えられる。さらにまた、(4) 習慣的行動の — 当該社会集団の成員間で一樣であるような — 集合的匿名的な性格が挙げられる。体系的な反省的思考や首尾一貫した目的意識が浮上し発達する余地もないほど深く馴染み、常軌とまでなってしまった、自明のこの種の日常普段の生活過程は — 共同体（の共同生活）の中で他の成員たちと密接な相互作用の関係を保ちつつ、同意や支持や是認を得ることを基本的前提として生活するすべての成員たちにとって — 当該共同体全体の規模において、すべての成員たちにとって、共通・一樣な仕方、慣れ親しんだ、全く自明の「集合的習慣（collective habits）<sup>(15)</sup>」としての生活過程・行動を意味する。最後に、(5) 習慣的行動の、個々人の性格の根幹部ないし最も根底的な層の表出としての性格が指摘される。この種の習慣的行動としてデューイは、例えば、①「言語の習慣（the habits of language）」、②「行儀作法（manners）」、③「よい趣味と美的鑑賞力（good taste and esthetic appreciation）」、そして④「価値判断の基準（the standard of judgments of value）」等を挙げている<sup>(16)</sup>。前意識的・習慣的行動は、個々人の内的な資質あるいは活動力の単なる特殊な、一側面、一機能、一要素の発揮や表現というようなものではなくて、彼の内的な資質あるいは活動力の全面的な全体としての、総合的な仕方における表現であり、彼の人格の最も根本的な層の、しかもその重要な諸側面の全面的で且つ、総合的な仕方における表現である。

そこで、以上述べた習慣的行動の一般的諸特性を考慮に入れつつ、新たな習慣概念を、デューイに従ってまとめてみるとすれば、次のようになる。まず第1に、習慣が行動の特性であること、またすべての行動は有機体と環境との「相互作用（interaction）」であると考えられることから、習慣的行動様式（組織）は、環境の諸条件を「統合して（incorporate）」いるものであって、単に有機体の内的な機能の組織ではなくて、客観的な性格を有するものであるということが指摘される。習慣的組織とは、有機体が「環境を使用し統合する仕方（ways using and incorporating the environment）」であり個々人の「構造（make-up）」によって与えられる諸要素と環境の諸条件との相互作用の様式である<sup>(17)</sup>。第2に、行動の習慣的な組織が、他方において行動主体の「意志」、さらには「自我」の働きとも密接な相互作用の関係をもち、それらの諸機能をも統合して含んでいるものであることが指摘される。習慣的行動様式は、自我の根幹部に深く食い込み、それを構成しているものであり、「目覚めている間中作用し続けている（operates all the time of waking life）」ものである<sup>(18)</sup>。さらにまた、ある具体的な行動において直接的に支配的であるようには見えない習慣的機能でもその働きをやめているわけではない。形成された無数の習慣がその行動の中に働きを及ぼしている。その事例として、例えば、①目測においては距離や方向の認識は、人がじっとしている時でも彼の見ることの中へと歩くという習慣的行動が表現されていることを示す場合、②夢の中にさえも現れて、われわれの活動

や動作を支配する場合、③人が目つきや身振りの中にうっかりその正体を現してしまったり、また個々の行為を通して性格が読み取られたりする場合、等々である<sup>(19)</sup>。かくして、われわれは諸々の習慣的組織が相互浸透しあって習慣の体系を構成しており、この習慣の体系が個々の行動を支えるものとして作用していることを、指摘することができる。そして、デューイによれば、この習慣の体系の相互浸透こそ、「性格」の存在基盤を為すものである。

### 3 習慣的行動の再構成の過程

—小学校5年生算数「四角形と三角形の面積」の単元での知識獲得過程をモデルにして—

われわれの行動を枠付け支える習慣的行動様式には、一定の安定性がある。前述したとおり、習慣的行動は通常、半ば無意識的に為されているが、まさにそのこと自体が習慣的行動様式の安定的な性格を証拠立てている。われわれが、それ自体を主題的・反省的に意識して支えることをしなくても、習慣的行動はそれ自らの枠組みに基づいて展開されていく。というより、習慣は変化し難いものであるということは、常識の最も確固たる部分である。しかしながら、われわれの極めて安定的な性格を持つ行動への没頭が挫折し、それまでの習慣的行動が妨害されその安定性と通用力が失われ自ら破綻をきたす場合がある。

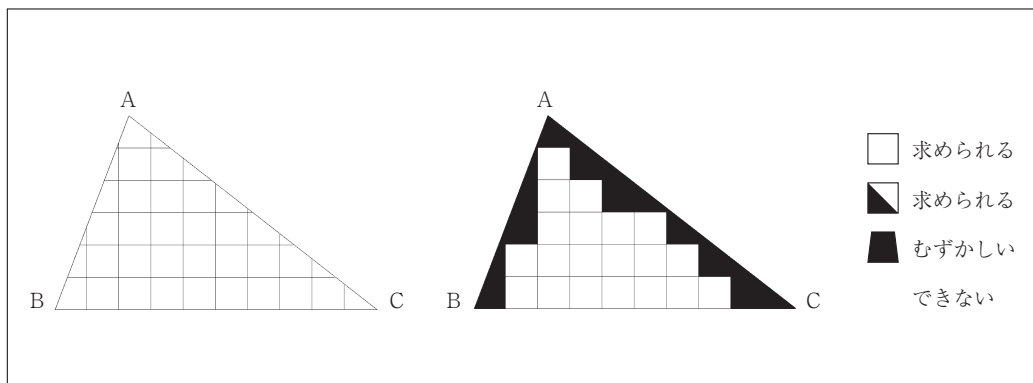
そこでまず、われわれの既成の習慣的行動様式、習慣の体系が変革されるのは、これまで想像できなかったような何らかの新奇な諸条件が活動の状況のうちに出現し、行動の状況が根本的な変化に直面したような場合である。この場合には、活動の意図・目的や活動状況を構成している事物の出来事の意味についてのこれまでどおりの理解が行き詰まり、その種の理解を前反省的な暗黙の仕方で保障していた、われわれの習慣的行動様式の体系が、一定の仕方で変革・修正を被ることになる。そしてこの活動状況における新奇で異質な条件の出現は、第1に、心身の障害や病気等活動主体の主観的条件の変化として生じる場合や経済的、社会的、文化的等の環境の諸要素の予想外の変化として出現する場合である。そこでは、これまでに経験したこともない、未知の状況が展開することになる。一方、活動状況における諸条件の変化の程度が決定的で根本的でない場合は、従来の習慣的行動様式の体系の機能上の混乱は、さして重大なものにはならず、これまでの熟知したやり方に基づいて、若干の修正や補完を施して新たな活動が再開される。第2に、特に重要であるが、活動主体自らが、より熟達した活動モデルに刺激されたり、ある理念に向かってダイナミックにこれまでの活動の仕方や手順の根本的な変革・修正を目指して、これまでの習慣的行動様式の体系を再構成しようと乗り出す場合である。このことは現在のものより、もっと合理的でうまい方法はないか、もっとうまくやろうなど最上のものを求めようとする旺盛な探求心と積極的・意欲的な思考の入り込みを意味する。これはこれまで形成された習慣的組織を総動員し、それに依拠しながら、その機能を超越して、それ自らを変革・再構成する場合である。

それでは、根本的に変化した状況の中で、これまでの習慣的行動の体系が、いかなる諸段階を辿って再構成され、新たな習慣的行動として獲得されていくのかという問題を、子どもたちによって学校＝学級で展開される学習活動の中で新たな知識が獲得される過程をモデルにして考察する。まず、子どもたちの学習においては、これまでの学習で身に付けた経験の層が反省的意識の働きの過程を取り囲んで広く存在している。この強固で、一定の安定性と通用力を持つこれまでの習慣的行動、即ち学習経験は、既に述べたような活動主体の主観的・主体的諸条

件や日常生活を構成する諸々の要素・条件の変化、及び活動主体＝子ども自らが意図的・意欲的にこれまでの学習経験を再構成しようとする行動等の下で、具体的な直接的活動の過程が挫折・中断させられて、「面喰った状態（lost our heads）<sup>(20)</sup>」におかれることになる。そこで、これまでの学習経験は、親しみ慣れた状況下でそれが有していた効力や能率を消失して機能停止の状況に陥る。これまでの学習経験の流れの停止とともに、活動のエネルギーはそのはけ口を失い、衝動的なエネルギーとなって内向し、不安、不満、焦燥、欲望等の情動の形をとってわれわれの内面に展開する<sup>(21)</sup>。しかし、躊躇やどっちつかずのこの情緒的な混乱の状態はいつまでも続くわけではなくて、やがて生じてくる反省的熟慮の過程を通じて、その衝動的エネルギーは新たに構想された行動へと吸収されていく<sup>(22)</sup>。

さて、ここで、習慣的行動が変革・再構成される過程を、小学校5年生の算数「四角形と三角形の面積」の単元の学習を例に挙げ具体的に考察する<sup>(23)</sup>。この単元のねらいは、「三角形や平行四辺形、ひし形及び台形の面積の求め方を、既習の求積可能な図形の面積の求め方を基に考えたり、説明したり、公式をつくり出したりすることや、その過程で筋道を立てて考える力の育成を図ること<sup>(24)</sup>」である。

先ず、第一段階で、ある直接的な活動の状況が活動主体によって、不確定で、「問題状況（problematic situation）」と見なされ、改めて問われ疑問視され探究されなければならないものであると感じられ決定される<sup>(25)</sup>。この場合、活動主体によって感受された活動の状況が帯びる不確かさは、ただ単なる一般的な不確かさではなくて、この場合に固有の特殊な性質に彩られ方向づけられたある具体的な情調を帯びた不確かさである。即ち、この単元の導入部分である「三角形の面積の求め方を考えよう」という題材で、面積の求め方を子どもたちが自ら作り出していく場合がこれである。子どもたちは、これまで、正方形と長方形の求積方法は学習済みであるが、三角形の求積方法は初めてである。平行四辺形からの導入にすると、見たところ長方形に似ているから何とかかなりそうだという感じを抱かせることはできるが、三角形からの導入では、子どもたちはみな戸惑ってしまう。一瞬、教室の中がざわついたほどである。「これまでどおりではうまくいかない」、「何か変だぞ」という状況に陥ってしまう。子どもたちは、既習の何に注目すればよいのか、またどういうアイディアを利用すればよいのか、本時の問題と結びつけて考えることができず戸惑ってしまう。中には、苦しまぎれに1センチメートルの方眼を引き、マス目を数えて求めようとする子どもたちが現れる。しかしこれでは、端の部分



図－1 三角形の求積方法

の面積は、求められるものとうまく処理できないものがでてしまう。「さてどうしよう、困った…。」(図-1)

第二段階で、問題にアプローチする観点が明確になるとともに、問題の具体的意味内容を確定することとなる。「問題の式をうまく立てれば、解決したも同然 (a problem well put its half-solved) である<sup>(26)</sup>。ここで、再び算数の例に戻る。子どもたちは、「三角形の面積はこのままでは求めることはできない。なんとかして、これまで学習した長方形の面積の求め方を手がかりにして考えることができないか」ということに至る。

第三段階で、さしあたりの学習活動の問題的状況の打開を目指した子どもたちは、「この場の事実 (the facts of the case)」を確定し、これまで形成された学習経験に依存し、それを動員しつつ問題的事態の中から少なくとも相当程度安定した規則的で明確なもののうちで仮設的観念を構想し構成する<sup>(27)</sup>。再び算数の例に戻る。この段階で、子どもたちは、既習事項である長方形の求積方法が、三角形の求積方法にも使えないか考え、直角三角形に分割するアイディアを基に、問題解決の計画を立てるのである。即ち、三角形の頂点Aから垂線をおろし、直角三角形をつくってから面積を求める倍積変形の方法に着目するに至る。そうすることによって、

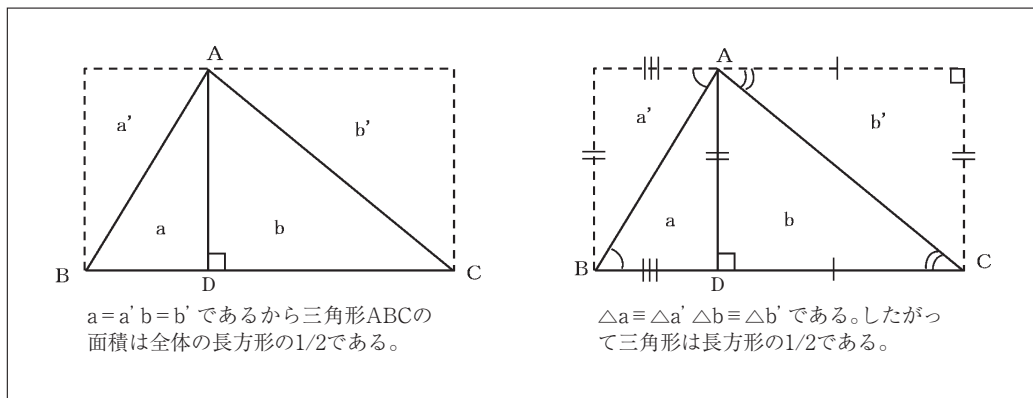
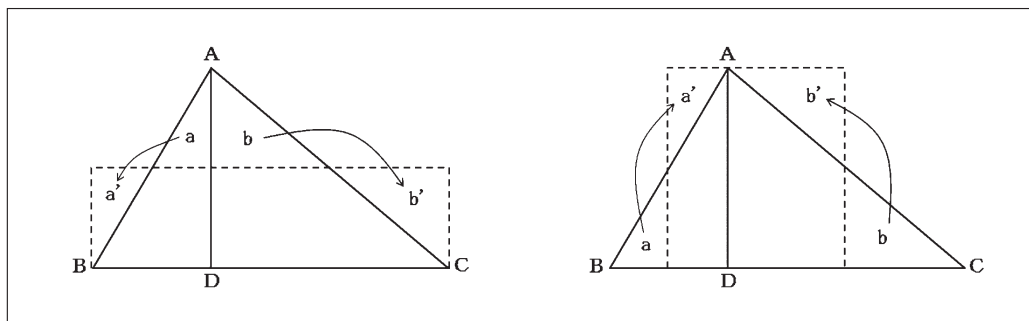


図-2 三角形の求積方法一倍積変形

長方形の面積の $1/2$ という結論になる。ここで重要なのは、三角形aとa'、三角形bとb'が本当に合同になっているのかその根拠を明らかにできるかである。教師の重要な指導上の留意点はここにある。形が何となく似ているからとか、大体大きさが似ているからだけでは解決の手がかりになり得ても、根拠ある説明あるいは証明にはなり得ない。この第三段階こそ、これまでの学習経験再構成の核心部分をなすものとなる。(図-2)

第四段階として、子どもたちは、暗示された新たな学習活動の目的の仮設的観念の諸々の意味内容を、それらの意味や概念が通常所属していると考えられている、一定の意味体系の中に位置づけて、論理的にみて首尾一貫した内容構成をもつものとして可能な限り具体化していくことになる。この段階の操作が「推論 (Reasoning)」と呼ばれるものである。仮設的観念の意味する内容を具体化するこの種の操作は、この仮設そのものを認めるべきか、拒否するべきかを判断する上で、最も有効な実験条件をはっきり提示するほどまで徹底して展開される<sup>(28)</sup>。そこで、再び事例に戻る。子どもたちは、この段階で、問題解決のための計画の実行をするの

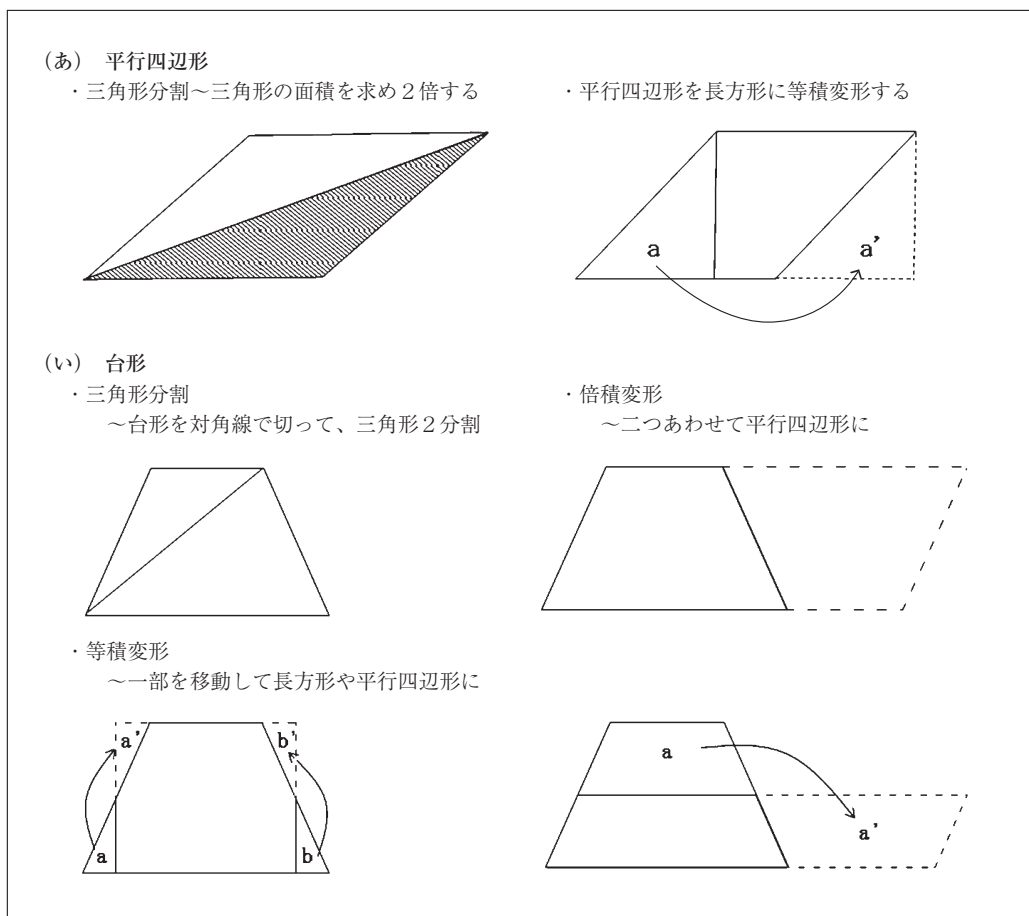


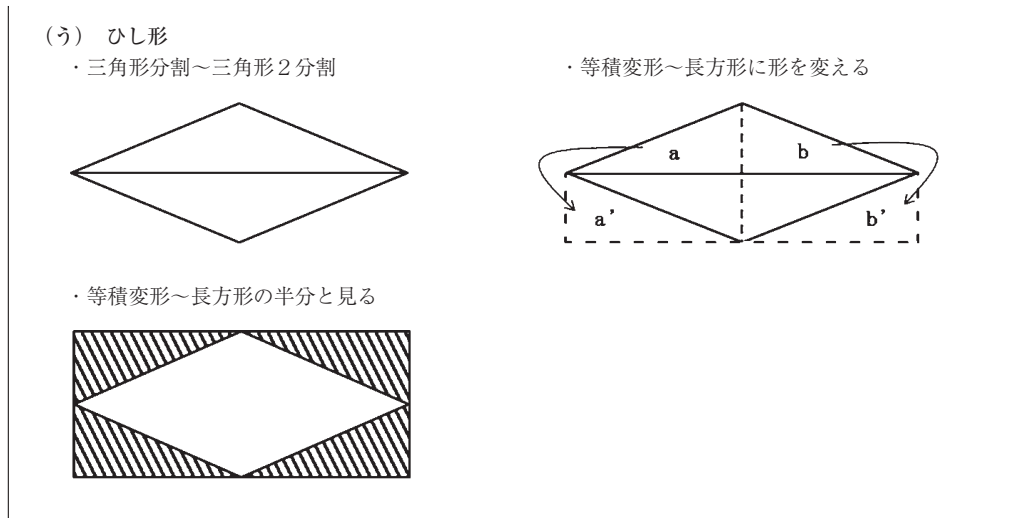


図－3 三角形の求積方法－等積変形

である。実行に際し、幾つかの考えられる解決方法に基づきながら、絶えず振り返り自己の解決法の妥当性を吟味しながら問題解決に取り組むのである。(図－3)

そして、最後に仮設的観念の意味する内容を具体化する操作過程がたどり着いた具体的命題に基づいて、それが指示する条件－結果の操作を実際に行ってみる。いわゆる実験を行い、仮設的観念の妥当性を明らかにするのである<sup>(29)</sup>。(図－4)





図－４ 平行四辺形、台形、ひし形の求積方法

## 結論

さて、これまで習慣的行動が再構成されるそのメカニズムを、学校＝学級で展開される子どもたちの学習活動において知識が新たに獲得されるその過程をモデルにして考察してきた。

デューイにおいては、習慣的行動を再構成することの究極の意味は、習慣的行動様式の再構成が含んでいる、社会的な問題との関係においてである。即ち、行動様式としての習慣は、それが行動主体個々人における習慣の体系の根幹部分をなすものとなるほど、当該社会集団の成員に共通・一様な仕方ですべて所有されているという匿名的・一般的な性格を強めるに至る。その種の行動様式は、最早個人的・私的な規模の行動特性というよりは、むしろ当該社会の一般的・根本的な行動様式、さらには行動規範というような種類のものに近づく。個々人は、自らの周囲を取り囲んで広がっている、社会的に一般的なものの見方・感じ方、生活・行動様式の中で、それに支えられまたは規制されて、自らもそれに依拠する。当該社会集団に一様なその種の行動様式は、彼にとって、いわばその視野の地平をなすものであって、それ以外の仕方など思いも及ばない、唯一無二の自明な様式である。そして、個々人における習慣体系の根幹部分をなす、この種の行動上、意識態度ないし感性の様式の再構成が問題に上るに至ればそれは最早単なる個人の問題の枠組みを超えてしまう。したがって、それがある程度の規模を超えるに至れば、必然的に彼の属する共同体生活の全体に及ぶ一般的・根本的な改革の過程を前提することになる。したがって、一社会の人々全体がその生活過程の根底をなすものとして共有している一般的な規模を持った習慣的行動様式を意識化し再構成することは、それは、社会的な規模における生活諸条件の変革を企てること、つまり最も根本的な意味における「社会改革 (Social reform) <sup>(30)</sup>」に携わり、加担することである。そしてまさに、一社会の人々すべての生活経験を、根底的な仕方改革・改善することは、そのままデューイのいわゆる「民主主義 (Democracy)」の考えを示すものである。「民主主義」とは、単なる政治形態を意味するものではなく、一社会の人々が係わるような経験の根本的な枠組みを発展させることと結びついたものである、というのが彼の首尾一貫した理想の一つであるからである <sup>(31)</sup>。

デューイは、「哲学」を、日常の一般的・根本的な枠組みをなす集合的な習慣的行動様式の意識化と再構成の働きを担うものとしての民主主義的な社会改革の一器官とするが、このことについて詳細に触れる必要があるが割愛する。

## 註

- (1) J. Dewey : Experience and Nature, Dover Publication Inc. 1958 pp.3-4.
- (2) ibid., p.4.
- (3) ibid., p.4.
- (4) J. Dewey : Theory of the Moral life, Irvington Publisher. 1908, pp.9-10.
- (5) J. Dewey : Human Nature and Conduct, The Modern Library Inc. 1922 , p.40.
- (6) 野村庄吾『乳幼児の世界』岩波新書、1980. アドルフポルトマン、『人間どこまで動物か』高木正孝 訳 岩波新書、1961.
- (7) J. Dewey : Logic : The Theory of Inquiry, The Later Works, 1925-1953, p.109. 『論理学－探究の理論』上山春平 責任編集 中央公論社 S.55, p.430.
- (8) Theory of the Moral life, p.10.
- (9) Human Nature and Conduct, Forward.
- (10) ibid., p.25.
- (11) ibid., p.25.
- (12) ibid., p.26.
- (13) ibid., p.25.
- (14) ibid., p.168.
- (15) ibid., p.55.
- (16) J. Dewey : Democracy and Education, The Macmillan Company, 1916, pp.17-18.
- (17) Human Nature and Conduct, pp.18-19.
- (18) ibid., p.36. 同様の詳しい指摘は、『民主主義と教育』において見ることができる。Democracy and Education, pp.46-49.
- (19) Human Nature and Conduct, pp.36-37.
- (20) Logic : The Theory of Inquiry, p.109.
- (21) Human Nature and Conduct, pp.169-170.
- (22) ibid., pp.158-159.
- (23) 筆者の実践事例である。詳しくは、『算数科・新しい問題解決の指導【実践編・上学年】－どの子も楽しく学んで力がつく授業－』伊藤説明他編著者 東洋館出版社、S.62.11.20を参照。  
「単元の基本構想－子どもたちの身の回りには、いろいろな形をしたものが存在し、その数は限りない。その中で三角形は平面図形で最も単純な形であり、平面図形の基本であるといえる。このことは、実生活の中を見わたしてみてもそうであるし、また土地の測量や、五角形・六角形の面積を求める場合に、対角線で三角形に分割したり、多角形を囲む長方形を考えてその長方形から多角形の外側の部分の直角三角形を引き去って求積する方法が一般的によく使われていることから明らかである。このような考えにたち、①三角形→②平行四辺形→③台形→④ひし形等の指導段階をとることにした。ちなみに、教科書のほとんどが、平行四辺形からの導入である。その理由は、平行四辺形が、既習の長方形に極めて似た形であるという感覚的な理由からのようである。しかし、私はこの考え方には与しない。なぜならば、算数・数学の授業のねらいは子ども一人一人に数学的な考え方を身に付けさせることにあり、数学的探究のセンスを磨くことにあると考えるからである。」
- (24) 『小学校学習指導要領解説 算数編』文部科学省 東洋館出版社 H.20.8
- (25) Logic : The Theory of Inquiry, pp.108-109.
- (26) ibid., pp.111-112.
- (27) ibid., pp.112-114.
- (28) ibid., p.155.
- (29) ibid., pp.115-116.
- (30) Experience and Nature, p.411.

- (31) 拙稿「習慣的行動に注目することの意味－経験再構成の広がりと深みを規定するもの－」『日本デューイ学会紀要・第34号』1993、「習慣的行動の再構成のメカニズム」『日本デューイ学会紀要・第35号』1994